

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月1日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：10004269

研究課題名（和文） 米国による対日文化政策に関するコンデ資料の調査研究

研究課題名（英文） Investigative Study of the U.S. Cultural Strategic Policy towards Japan through David Conde Fonds

研究代表者

小泉 真理子 (KOIZUMI MARIKO)

京都精華大学 マンガ学部 講師

研究者番号：60468527

研究成果の概要（和文）：戦後、連合軍総司令部（GHQ）は日本を統治する手段として文化を用いた。映画演劇を通じて日本人の民主主義の意識形成に関わった人物に、民間情報教育局の映画班長であったデヴィッド・コンデがいるが、その人生については明らかになっていないことが多かった。本研究では、彼がカナダのブリティッシュ・コロンビア大学図書館に自己の大量の記録を寄贈していることを発見したため、本資料を入手、整理し、デジタル化して公開した。本研究は、米国による対日文化政策の全貌解明に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：Just after World War 2, the General Headquarters of the Allied Powers (GHQ) utilized cultural power as a means to govern Japan. David Conde, who worked for the Civil Information and Educational Section in Japan and supervised the Japanese film industry, had significant influence in establishing conceptions of democracy among Japanese citizens through film production. However, many aspects of his life remained unclear. This research discovered that he had donated a large number of documents which he collected in his life to the library at the University of British Columbia in Canada, and digitized the documents in order to publicize them. The U.S. cultural strategic policy towards Japan is expected to be wholly revealed through analysis of these digitized documents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	2,500,000	750,000	3,250,000
2012年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	7,200,000	2,160,000	9,360,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：文化政策、日本：アメリカ、デヴィッド・コンデ、連合軍総司令部（GHQ）

1. 研究開始当初の背景

連合軍総司令部（GHQ）の対日文化政策に関する研究は、GHQの公文書とプランゲ文庫のコピーが日本に持ち帰られて、国立国会図書館等に所蔵、公開されてから進展した。

戦後の映画演劇を通じて日本人の民主主義の意識形成に主体的に関わり、日本の労働運動の火付け役となった人物に、民間情報教育局（CIE）の映画・演劇課の初代の映画班長であったデヴィッド・コンデ（David Conde）がいる。コンデは思想的に特異で謎の多い人物で、GHQの方針に反した政策をも実施しており、この内容についてはGHQが把握しきれていない。しかし、戦後の対日文化政策に関する情報は主にGHQが公開した資料が基になっている。研究分担者である濱野の著書『偽りの民主主義：GHQ・映画・歌舞伎の戦後秘史』において、コンデを調査研究した。調査の過程で、日本国内で公開されている資料だけでは研究の進展が望めないことが判明し、国外まで調査を拡げていたところ、コンデがカナダのブリティッシュ・コロンビア大学（The University of British Columbia）図書館に、大項目の目録で84頁に及ぶ資料を1975年以降4回に分けて寄贈していることを発見した。

2. 研究の目的

本研究はその原資料をデジタル化し、日本に持ち帰り公開することにより、コンデが関わった対日文化政策を明らかにすることを目的とする。

大量の紙の資料をデジタル化することで、持ち運びやコピーが容易となり、日本のみでなく海外においても広く一般に資料の利用が可能となる。

コンデは映画を通じて、戦後日本人の意識形成に影響を与えた人物である。1945年9月22日にGHQが発表した占領期間中の映画演劇の指針を、日本の映画人や演劇人に説明したのはコンデである。コンデの指導により、敗戦直後には日本の封建主義を批判し、民主主義を称揚する映画が製作された。これらの映画は、一般大衆に受け入れられ、映画評論等でも高い評価を得て、現在も繰り返し上映され、今もってコンデの影響は続いている。さらに、コンデは映画会社に、労働組合を作るように強く促している。このようにコンデは映画を通じて日本人の民主主義への理解を促進するために、活発に行動している。しかしながら、コンデ自身が個人情報を隠蔽してきたことと、戦後直後のGHQの公文書が少ないため、彼の活動目的やその背景等は

ほとんど判っていない。日本国内にあるのはGHQの公文書と、コンデを知る映画人のわずかな伝聞だけである。本研究が入手、整理し、公開する資料によって、これまで不明のままに放置されてきた対日文化政策が明らかにされるとともに、謎とされてきたコンデの実像が判明することが期待される。

本研究は、戦後GHQが日本を占領統治する手段として用いた文化政策やその後の影響に対して、正確な情報を調査し整備することに寄与するであろう。コンデ資料の公開で、米国は映画文化を統治にどのように利用していたのかにつき、研究が促進され、その全貌が明らかになることが期待される。

3. 研究の方法

本研究では、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学図書館に所蔵されているコンデ資料を、整理した上で、デジタル化して公開した。そして、資料分析のために必要な文献やインタビュー調査をも実施した。予定通りスキャン作業は終了したものの、作業実施にあたっては、資料の量が膨大なため、デジタル化作業をレベル分けして、作業量の見積もり誤差や遅れがあった場合にも、成果を得る計画としていた。また、研究協力者がニューヨーク在住であること等を活かして旅費の経費節減や連絡の円滑化に努めた。年度毎に研究方法の詳細を報告する。

(1) 平成22年度

同大学図書館との電子メールや電話でのやりとり・訪問等により、実際のスキャン作業を実施する前の準備をほぼ整えた。

【複写資料の優先順位の決定】

将来的に本資料を多くの研究者が多面的な目的で利用すると考え、特定の判断基準での取捨選択は控えて、忠実に複写することとした。但し、作業の効率化と費用節約のため、目録作成時にスキャナーの複写の可否を考えて選定した。選定要件は以下の通りである。

- ・コンデの著書：日本で出版され国立国会図書館にあるものは濱野が所蔵済みで、それ以外のものがあれば複写する。
- ・コンデの雑誌記事：国立国会図書館にある記事は複写済みで、それ以外のものがあれば複写する。
- ・草稿：原則としてすべて複写する。
- ・私信：すべて複写する。
- ・写真：すべて複写する。
- ・収集資料：コンデが収集した著書や新聞雑誌の記事が多く寄贈されているが、それらの資料の内、日本で容易に閲覧可能なものも少

なくないため、日本でも入手が困難な書籍や報告書、雑誌、あるいは書き込み等がある個所は複写する。

【資料公開基準の決定】

公開に関する大学図書館側の条件や制限を協議し大枠を定めた。

【スキヤニング・フォーマットの選定】

長期間資料を閲覧しやすいフォーマットについて検討した。

【ブリティッシュ・コロンビア大学とのスキヤン作業の役割分担の決定】

スキヤニングの方針は両者で協議するが、実際の作業はブリティッシュ・コロンビア大学側をお願いすることとした。また費用負担についても協議した。

【図書館関係者へのインタビュー】

コンデが資料を寄贈した経緯について調査した。

【コンデ遺族による資料公開の許諾】

長女がサンフランシスコ在住であることをつきとめ、スキヤン及び資料の公開の許諾を得た。

【スキヤニングの試行】

本格的なスキヤニングを行う前にテストで実作業した。文献資料の複製は、マイクロフィルムで撮影することが多かったが、マイクロフィルムの閲覧は、特殊な機器が必要なため、スキヤナーでデジタル・データとした。

(2)平成 23 年度

資料を所蔵しているブリティッシュ・コロンビア大学との調整、スキヤニング作業の試行は前年度に終了したため、本格的に資料のデジタル化作業を行うとともに、関連の調査も実施した。詳細は下記の通りである。

【スキヤニング作業の実施】

84頁にわたる大分類の英文目録は、1975～82年にかけてブリティッシュ・コロンビア大学で作成されているが、それをタイプ起こししエクセル化した。スキヤン作業時に、目録に記載されている資料タイトルやページ数に間違いがないかを確認し、気づいた点を記入した。

資料の量が膨大なため、項目毎に作業が終わり次第、スキヤニングを依頼している同大学から、逐次日本にデータを送付してもらった。日本側では、内容を確認していきながら気づいた点を目録に付加していった。目録はカナダで日本語能力のない者が作成したため、合わせて日本語の雑誌名、漢字での資料タイトル表記等の誤植の修正をした。

【コンデの活動実態の調査】

米国サンフランシスコにおいて遺族へのイ

ンタビュー、ロサンゼルスにおいて映画芸術科学協会マーガレットヘリック図書館の文献調査をした。現在日本で入手可能な資料では、明らかにすることができなかったコンデの米国における活動の内容、米国への帰国理由等が判明した。

【ホームページ作成】研究代表者が所属している京都精華大学のホームページに本研究を紹介するページを作成した。これにより、本資料の存在の一般周知に努めた。

(3)平成24年度

コンデ資料のデジタル化を終了し、公開した。これにより、当初の研究目的を達成した。実施事項は下記の通りである。

【資料のスキヤン作業の終了】

保存状態からスキヤニングに細心の注意が必要なため、作業が残されていた資料等についても終了した。PDFファイルで約2,600ファイル、全データ量は約41GBに及ぶ。

【デジタル資料のリスト整備】

スキヤニングが終了した全資料につき、公開のためにファイルの格納場所等を加えたリストを整備した。さらに、デジタル資料の閲覧方法につき解説文書を作成した。

【資料の配布方法の決定】

デジタル・データを閲覧の簡易性等からSDカードに保存することとし、配布窓口を決定し配布体制を整備した。

【関連資料の調査】

ハワイ大学マノア校図書館を訪問し、GHQの組織や検閲に関する資料を閲覧し、同図書館関係者らにインタビューした。

【解説報告書の作成】

本研究の作業の経緯、コンデの紹介、資料の分析を冊子にまとめた。

【資料の公開および配布】

ブリティッシュ・コロンビア大学等の関係図書館に寄贈した。これにより、日本のみでなく北米においてもデジタル資料の閲覧が可能となった。また、実費にて希望者に資料と解説報告書を配布した。

4. 研究成果

(1)本研究の成果

本研究では、当初の目的を達成し、戦後のGHQによる対日映画政策を主導したデヴィッド・コンデの大量の記録を、デジタル化して公開した。そして、不明であったコンデの活動や経歴等についてもインタビュー調査等で明らかにした。「5. 主な発表論文等」以外に公開した成果物とその内容は下記の通りである。

・デジタル化したコンデ資料

PDFファイルで約2,600ファイル、全データ量は約41GBに及ぶ。SDカードで配布できる形に保存した。内容は、コンデの書籍の草稿、コンデの写真や私信等、コンデが関係した多岐に亘る資料である。

・デジタル資料のリスト

全資料につき、公開のためにリストを整備した。リストの記載項目は記載順に、資料タイトル、ページ数、資料発表年月日、ファイル番号、ブリティッシュ・コロンビア大学による注記、ファイルの有無、ファイルの格納場所、本研究グループによる注記である。SDカードで配布できる形に保存した。

・デジタル資料の閲覧方法についての解説文書

作成し、SDカードで配布できる形に保存した。

・コンデ資料の解説報告書

調査で明らかになった、コンデが米国ではセールスマンをしていたこと、二度目の来日後の米国への帰国理由は体調不良であったこと等を小冊子として報告書にまとめた。

(2) コンデ資料の公開で期待される今後の研究

占領下の映画や演劇等を通じて対日文化政策を行った中心人物の個人資料を公開することによって、半世紀に亘って放棄されていた以下のような新しい研究を誘発することが期待される。

・GHQの対日文化政策

1945年9月22日にGHQは占領期間中の映画演劇の指針を発表したが、それらの封建的表現を禁じる方針を日本の映画人や演劇人に説明したのもコンデであった。占領開始時にはGHQの公文書は少なく、本コンデ資料の活用が望まれる。

・占領期間中の映画による文化政策

日本における「戦後民主主義」の意識形成において、視覚メディアとしての映画の役割は極めて大きい。敗戦直後に日本の封建主義を批判し、民主主義を称揚する映画は、一般大衆に受け入れられ、映画評論等でも高い評価を得た。この「民主化」を目的とした映画は、コンデの指導によって作られたことが、様々な資料から明らかになっている。1946年に公開された少なくとも10本の日本映画はコンデ自身のプロデュースに近い形で製作され、『大曾根家の朝』は戦後初のキネマ旬報ベストテンの1位に選ばれた。

これらの映画は現在も繰り返し上映され、後々まで強い影響を残し、今もってコンデの

影響は続いている。その経緯については日本の映画人の断片的な記憶しか残っていなかった。

・占領期の労働運動と独立プロダクション

コンデは映画会社に、労働組合を作るように促し、撮影所で労働組合の結成を急がせ、会社と交渉する方法等についても組合員を指導している。その結果として戦後最大の労働争議と言われる東宝争議が起こった。

以上のように本研究は戦後史の中で重要でありながら、手つかずになっていた研究やコンテンツ研究を誘発する契機となるものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 浜野保樹、メディア芸術祭、文化庁月報、査読無、10月号、2010、6-7
- ② 浜野保樹、フリー・コンテンツ、ビジネス法務、査読無、9月号、2010、1

[学会発表] (計5件)

- ① Mariko Koizumi, How do Japanese Traditional Performing Arts Remain Active Over the Ages? The Case of Kabuki's Management, The 39th International Conference on Social Theory, Politics and the Arts, 2013年10月, Seattle University, The United States of America
- ② 石川洋聡、濱野保樹、制作と流通の関係性におけるポーモルのコスト病モデル構築に関する研究、文化経済学会<日本>、2011年11月25日、青山学院大学
- ③ Mariko Koizumi, How do Japanese Traditional Performing Arts Remain Active Without Big Financial Support? The Case of Noh, International Conference on Arts and Cultural Management, 2011年7月6日, The University of Antwerp, Belgium
- ④ 石川洋聡、濱野保樹、コンテンツ産業におけるポーモルのコスト病-日米映画産業の比較研究-, 文化経済学会<日本>、2011年7月2日、名古屋大学

[図書] (計7件)

- ① 浜野保樹、ボイジャー、「解説『七人の侍』」、『七人の侍』(黒澤明脚本集 電子版)、2012、249
- ② 近藤司、萩野正昭、ボイジャー、木で軍艦を作った男、2012、178

- ③ 浜野保樹、ボイジャー、根本には悲劇であることが土台だ 解説『虎 虎 虎』、2011、－（電子書籍）
- ④ 浜野保樹、講談社、大系黒澤明 第四巻、2010、862
- ⑤ 浜野保樹、講談社、大系黒澤明 第三巻、2010、750
- ⑥ 浜野保樹、講談社、大系黒澤明 別巻、2010、382

〔その他〕

ホームページ等

京都精華大学 全学研究センター「米国による対日文化政策に関するコンデ資料の調査研究」

http://www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/?post_type=project&p=523

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小泉 真理子 (KOIZUMI MARIKO)
京都精華大学・マンガ学部・講師
研究者番号：60468527

(2) 研究分担者

濱野 保樹 (HAMANO YASUKI)
東京工科大学・メディア学部・教授
研究者番号：90138157

(3) 研究協力者

萩野 正昭 (HAGINO MASA AKI)
株式会社ボイジャー・代表取締役社長

佐伯 知紀 (SAIKI TOMONORI)
文化庁・芸術文化課・文化調査官

櫻井 英里子 (SAKURAI ERIKO)
翻訳家